

教室の外へ ～課外活動の提言～

増島 繁延

カザフスタン日本人材開発センター アスタナ分室

1. 実践の背景

カザフスタンではここ数年で日本語学習者数が減ってきており、カザフスタン日本人材開発センターアスタナ分室（以下、アスタナ分室）の受講生も一時期の半分にまで落ち込んでいる。その原因のひとつに中国語や韓国語の台頭が挙げられる。一般市民にとって中国、韓国、日本はほとんど同じ文化を持っている国と考えられており、彼らにとっての選択はより身近に感じられ、どのようなメリットがあるかにある。中国、韓国の経済発展と世界進出による勢い、また国を挙げての言語教育戦略の強化により、「日本」というブランド力が弱まっている。孔子学院や韓国センターでは様々な宣伝活動、無料コースや文化体験プログラム、奨学金制度などを売りに国を挙げて学習者を呼び込んでいる。一方、日本はカザフスタンが経済発展を遂げていく中でODA、JICAが撤退し、2国間のつながりが中国、韓国に比べ相対的に弱くなったこと、また、企業の進出などが遅れているため、関心が薄れている。当然、言語教育もその影響を受けており、大学での学習者の激減は専攻希望者の減少だけでなく、大学そのものが関心をなくしている。一般人を対象にしたアスタナ分室でも、大学での学習者減少に比例して減少が進んでおり、新規受講生の確保と、継続率を上げることが課題になっている。

アスタナ分室ではこの課題に対し、限られた条件の中で講座を魅力的なものにし、継続してもらうにはどうしたらよいか検討した。カザフスタンにおいて日常生活の中で日本語、日本文化に触れる機会は著しく少ない。受講生の学習動機は語学を学んで何かにかかすという具体的なものではなく、なんとなく日本語や日本文化に興味があるという程度のものである。将来日本に旅行に行きたい、日本に留学したい、日系企業で日本語を使った仕事がしたいなどの具体的な目標を持っている者もいるが、実現できる人は限られている。せっかく学習した日本語や日本文化の体験を遠く、当てのない将来に託すということは学習する当事者にとってはかなりの苦痛であろう。日常生活で気軽に、学習したこと、体験したことを何かに役立てることはできないものか。役立てることができれば、それは受講生にとって励みとなり、さらなる学習意欲に結び付くのではないかと考えたことが、以下に報告する課外活動の出発点であった。

インターネットの普及により、日本人も日本語教育機関もない、まったくの孤立環境にあってもネットを通じた独学により日本語を習得し、国内弁論大会で優勝した高校生もいる。これは、努力次第では独学習得も十分可能になったことを証明している。また、コースに通わなくても、自分のペースで学べるプライベートレッスンを受けることも可能だ。講座にやってくる受講生は何かしらの期待があってクラスで学ぶことを選んできているのではないか。個人としてではなくクラスとして学ぶことのメリットは何か。

受講生の継続率が高いクラスには大きく分けて二つの傾向がある。ひとつは受講生個々の学習意欲が高い場合、もう一つはクラス内の受講生の仲間意識が強い場合である。先に触れたように、受講生の中

で学習意欲が高い人は少ないが、「日本が好き」という点では皆、共通している。JF 日本語講座は、大学の「日本語研究」とは違う、世代を超えて共通の喜びを持つ者たちをつなぐ場を提供すべきではないか。

JF 日本語講座では「JF 日本語教育スタンダード」（以下、「JF スタンダード」）の理念に則った講座を運営している。「相互理解のために、様々な文化に触れることで如何に視野を広げ他者の文化を理解し尊重するか」という異文化理解能力の養成が講座の目標である。JF スタンダード準拠教材『まるごと 日本のことばと文化』（以下、『まるごと』）の導入により、従来の教材に比べ、日本の文化的背景を学んだり、考えたりすることができるようになっている。これまでもコースの中に文化体験などの活動時間を組み込んでいるので、文化に触れる機会は増えているが、今までの文化体験を振り返ると、内容がマンネリ化し、継続性、発展性がない（図1）。例えば、書道、浴衣の着付け体験などは一度体験すれば2度も3度も体験したいという人は少ない。浴衣を着付けてもらい、着付けの仕方を覚えても本人には浴衣がない。書道も、道具がなければ続けられない。

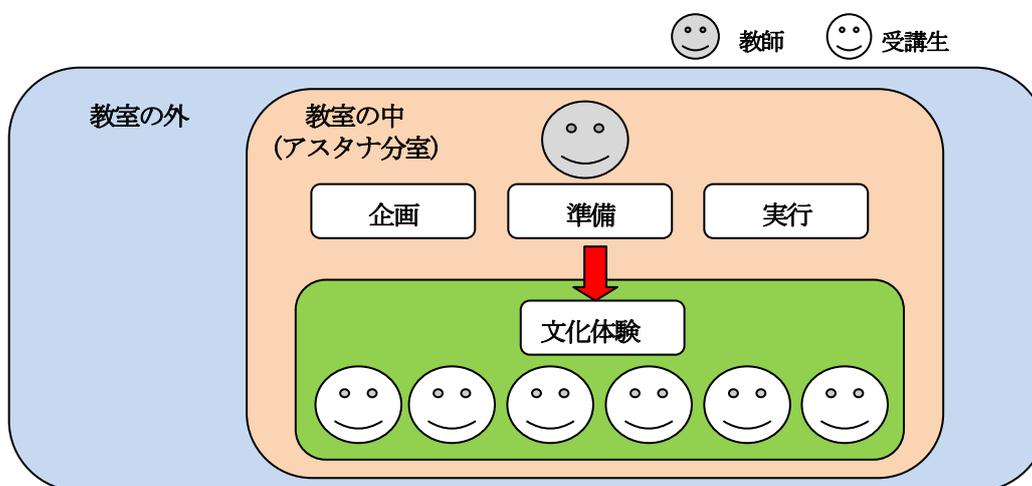


図1：従来の文化体験

文化体験はほとんどが教師や日本人ボランティアが用意したものでおぜん立てをして一方向に与えられるものである。『まるごと』では文化をより深く知るために自国の文化について振り返ることを重視している。しかし、従来の文化体験では振り返る機会があまりなかった。受け身ではなく、受講生がクラスの仲間と協力しながら能動的に発見していく喜びを生み出せるような文化体験活動が行えないものか。さらには文化体験の先に受講生が教室を離れても続けていけるような活動に発展させられないものか。

以上のような背景と問題意識を踏まえながら、アスタナ分室では学習者が教室で学び、体験したことを遠い未来ではなくすぐに活用できる課外活動を試みた。以下、二つの実践を紹介しながら、その成果について報告したい。

2. 実践内容～二つの学習成果発表～

2.1 カザフスタン日本文化交流会

この活動は在留邦人の方からの「日本語を勉強している受講生のために日本文化紹介をしたい」という申し出がきっかけだった。日本人が講座にやってきて日本文化を紹介するということも文化体験にな

レベルである。その他のクラスの受講生にも声をかけ、発表を見てもらった。後輩たちの前で発表することはいい手本にもなるだろうし、日本とカザフスタンの文化の違いや相違点を比べることで新たな発見が生まれるのではないかという期待があった。

発表のテーマは両国の「正月」と「結婚式」を共通テーマとしたが、他のテーマを取り上げてよいことにした。「正月」をテーマに選んだのは実施時期に合っていたため、「結婚式」を選んだのは発表者からの希望を取り入れたためである。発表者の持ち時間は一人5分を目安とし、パワーポイントを使いながら日本語で発表するように指示した。準備は実施の2週間前から始めた。課外活動のため、授業のない日にアスタナ分室の事務所を受講生に提供し、発表内容、発表順番などについてクラスで話し合ってもらった。教師は同室で仕事をしながら必要に応じてアドバイスするが、話し合いには基本的に参加しないようにした。ここで大まかなことを決め、スピーチの原稿作成やスライド作成は個々が用意することになった。発表の数日前までにいちど教師に見せ、スピーチ原稿の修正、使用するプレゼンテーション内容のチェックをおこなった。発表する受講生たちは人前でスピーチした経験もなく、また自分たちの文化を人に紹介したこともなかったので心配していたが、初めからうまくできることを要求しなかったし、スピーチに間違いがあっても細かい修正はしなかった。活動の企画から準備、実施という過程を経験することが大切だと考えたからである。参加した日本人も、今回のように受講生の前で日本文化を紹介するのは、はじめての試みだった。

発表会では在留邦人5名（自称「チームアスタナ」）とLevel18の受講生6名が順番に発表した。前半の発表会では受講生の準備不足も相まって、緊張して思うように発表できない様子も見られたが、教室では見たこともない真剣な表情、熱心に伝えようという姿勢が見られ、興味深かった。日本人発表者も30人もの受講生を前にしてうまく伝えられているか不安な面持ちで、当初は受講生同様、緊張していたように見受けられたが、ユーモアを交えながら発表する中で会場にも笑いが起こり、和やかな雰囲気になっていった。日本人発表者のプレゼンテーション資料には、日本語がまだ十分理解できないレベルの受講生のために、ロシア語で説明を用意してもらった。



チームアスタナ(日本人有志)



Level18 受講生



「日本の結婚式」プレゼンテーション



「カザフの正月」プレゼンテーション

後半の交流会では、お茶菓子をつまみながら歓談してもらった。話題は自然と両国の文化について話されていた。在留邦人の方々は主に企業駐在員と大使館の職員であったが、日本料理のサンプル模型や、広報誌、日本の伝統的玩具などを持参、展示してくれたので話題には事欠かなかった。

この活動の翌日、発表した受講生が日本人発表者の方々といっしょに市内を散歩したそうである。雑談の席でそのような話になったようだ。課外活動の喜びのひとつはこうした人と人とのつながりである。結果的にそれが教室活動を豊かにし、モチベーションになっていくように思う。

この活動に参加した受講生が在籍しているコースの概要は以下の通りである。

レベル	B1 前半
実施コース名	Level 8
実施日時または期間	2013年9月～2014年1月
授業時間	120分@1コマ、2回×32週=64回
授業担当講師	報告者、ノンネイティブ非常勤
1クラスの学習者数	8人
学習者の属性	性別：男性1人、女性7人 年齢：10代2人、20代6人 職業：高校生2人、大学生2人、会社員4人
使用教材	『Jブリッジ』『文化中級日本語1』

2.2 日本文化紹介ボランティア

もう一つの試みは、アスタナ市内にある公立学校の教員からの「生徒たちに是非日本文化を紹介してほしい」という要請がきっかけだった。通常このような依頼に対してはセンターのスタッフや教師が準備し実施しているが、教室内での体験を教室の外で活用できないか考えた。教室内では「日本文化を体験する」だけの受講生が、自分の体験を外部に伝える側になることで、学習したことを振り返り、より積極的に日本文化を理解する機会になる。そして自分の体験が実社会につながることで、教室内でどまっていた活動に広がりを持たせることができるのではないかと考えた。そのような期待を持ちつつも、問題は受講生が賛同してくれるかどうかであった。

実施日の3週間前に『まるごと 初級2』で学ぶクラスの受講生に今まで体験したことを後輩たちに伝えようと呼びかけたところ、ボランティアとして協力してもらいと9名の受講生が志願してくれた。「カザフスタン日本文化交流会」で行ったようなプレゼンテーションや、授業で体験した文化（書道や折り紙、浴衣試着）を行ってはどうかと提案し、分担を決めた。あとは担当ごとに打ち合わせをして何をどのように発表するか決めてもらった（図3）。

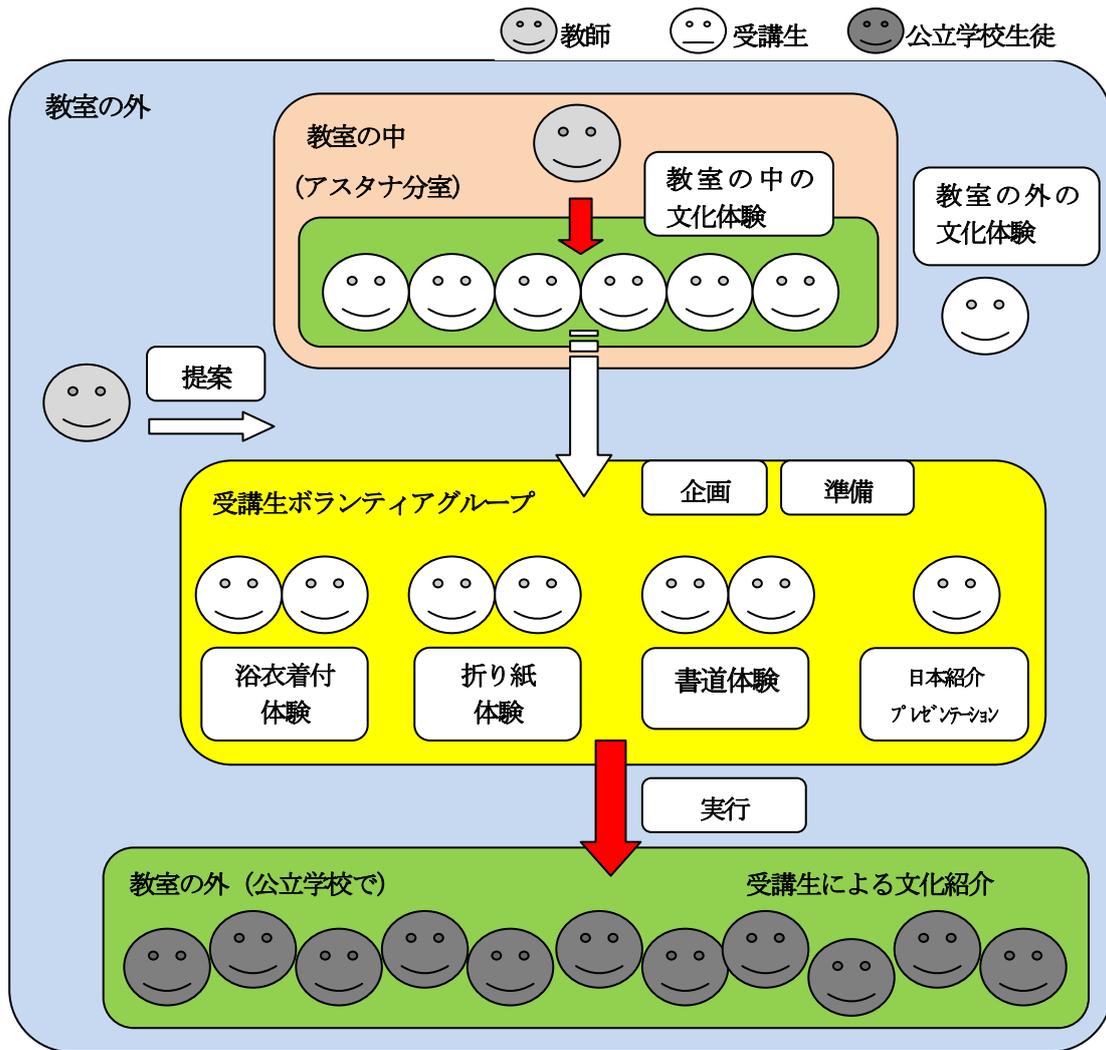


図3：「日本文化紹介ボランティア」

日本を旅行した経験のある受講生は、パワーポイントを使って日本と日本語について簡単な紹介をすることになった。折り紙はオーソドックスな「鶴」を教えることにした。書道は基本的に講師が指導するが、担当者には道具の説明や助手をしてもらうことになった。浴衣の着付け担当者は Youtube の帯の締め方紹介ビデオを見ながら自宅で練習してもらった。授業の際に各担当者に進行状況を確認し、前日に発表順を決めた。「カザフスタン日本文化交流会」では日本語での発表だったため受講生に負担がかかったが、この活動は母語による紹介なので日本語学習レベルが高くなくても気軽に参加してもらうことができた。

【日本文化紹介ボランティア】

日時：2014年4月12日(土) 14:30~16:00

場所：アスタナ市立52番学校

参加者：アスタナ日本語講座受講生有志(まるごとA2-3コース)8名、講師2名
アスタナ市立52番学校5年生20名、教員3名

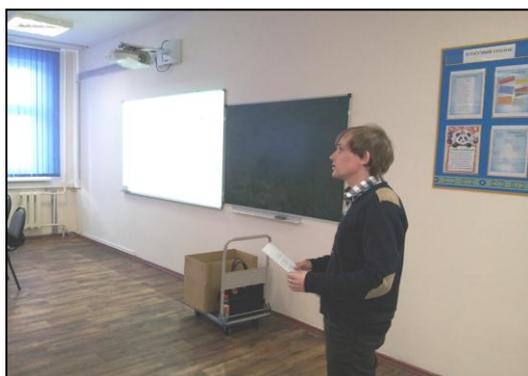
発表内容：1. 日本と日本語紹介

2. 浴衣の試着体験

3. 折り紙体験

4. 書道体験

先ず始めに日本と日本語の紹介を行った。担当した受講生は日本の地理や観光地をスライドで見せながら自分の体験を交えて日本を紹介した。そして簡単に日本語についても紹介した。小学5年生の子供たちのクラスであったが、これまで人前で発表したことがなかったので緊張している様子だった。生徒たちは興味深そうに聞いていた。次は浴衣の着付けを行った。5人の女子生徒に担当受講生2名と講師が着付けを行ったが、自宅での特訓でみごとに帯を締めることができるようになっていた。二人とも最初は緊張の面持ちだったが、無事に着付けが終わると笑みがもれていた。着付けを終えると写真撮影会になり、浴衣を着た生徒たちはとても喜んでいて、時間の制約があったため着付けてもらえなかった女子生徒たちは大変残念がっていた。折り紙は急遽「鶴」ではなく、短時間で折れる「コップ」に変更した。折り紙担当者は4名で、1名が生徒の前で折り方を実践し、残り3名は生徒をまわって指導した。普段は教えてもらう立場が教える立場になり、恥ずかしそうにしている様子も見られたが、一生懸命取り組んでいた。折り紙はカザフスタンでもよく知られているが、初めて折ったという生徒もいて、楽しそうに折っていた。書道はワークショップを行う予定であったが、時間がなかったため担当した受講生に書道の道具と使い方について簡単に説明してもらい、講師が書いた漢字を生徒に見せて意味を当ててもらうゲームに変更した。ワークショップはできなかったが、このクイズは大変盛り上がった。漢字という表意文字のイメージをつかんでもらえたのではないかと思う。文化紹介が終わってから反省会をして、今回のボランティア活動についての感想を聞いた。準備段階では率先して参加したいと言う者、なんとなくクラスメイトたちが参加するから自分も行くという感じの者、しぶしぶ参加する者など様々だったが、反省会では一様に「楽しかった」「面白かった」という感想を述べている。このあたりは教室内の文化体験と変わらないが、「ものすごく緊張した」「人前で話すのは大変だった」という今までにはない感想があり、「発表前は緊張したけど、実際にやってみて自信がついた」という達成感をあらわす受講生が多かった。そして「またやってみたい」「このような機会があったら是非協力したい」と一様に好評だったので、ボランティア連絡網を作ろうという話になった。また、今回参加してくれたクラスの横のつながりが以前にもまして強化されたように感じる。



スライドで「日本紹介」



浴衣の帯を締める受講生



折り紙教室



漢字の意味当てクイズ

この活動に参加した受講生が在籍しているコースの概要は以下の通りである。

レベル	A2
実施コース名	まるごと
実施日時または期間	2014年2月～6月
授業時間	120分@1コマ、2回×32週=64回
授業担当講師	報告者、ノンネイティブ非常勤
1クラスの学習者数	12人
学習者の属性	性別：男性6人 女性6人 年齢：10代5人、20代7人、 職業：中学生2人、高校生3人、大学生2人、会社員5人
使用教材	『まるごと 初級2』『かつどう』編、「りかい」編

3. 実践成果

今までの文化体験は実施する側（教師）とされる側（受講生）という二者の一方で行われていた。「カザフスタン日本文化交流会」では一方の体験をするのではなく、自国の文化を日本人に伝えるという課題を与えることで、受講生が能動的に関わる状況を作り出した。その結果、異文化を体験するだけでなく、自分たちの文化について振り返り、異文化と比較することで、より深い理解につながったと思う。また、自分の文化を相手に伝えることの苦労や醍醐味も体験してもらえたのではないだろうか。何をどのように発表するかをクラスメイトと話し合い、役割を決め、発表原稿を作ったり、スライドを作ったりする過程で成果物が生まれていく。これらは言語的・文化的体験の成果物としてポートフォリオに収まる。受け身の関わり方では単なる感想で終わってしまうものが、方法を少し変えるだけで違うものになった。

「文化紹介ボランティア」は、日本語学習歴が浅い受講生でも関わるができる課外活動である。日本語に関しては日常生活で活用する機会はほとんどないかもしれないが、文化はやり方次第ですぐに活用できる。どんな小さな体験でもそれを伝える場を作ることによって生かすことができる。そして、活用する場は探せばいくらでも存在する。今回はひとつの学校のクラスでの活動だったが、活動の場を変え

ることで半永久的に続けられる。市内にはたくさんの学校があるし、障害者施設、高齢施設などで行うことでより社会に貢献する活動に発展させることもできる。

講座に通いながら日本語を学ぶ受講生の利点は「共に学ぶ仲間」がいることだと思う。受講生同士のつながりが深まると、講座に通うのも楽しくなってくるし、教室の外でも継続されていく。しかし、一般人を対象にしたアスタナ分室のコースでは、受講生の職業も年齢も趣味も違うため、まとめるのは難しい。どうしても教師が率先して、いろいろなことを企画したり、準備したりして、そこに受講生を集めて共通の体験をさせながら仲間意識の形成に努めることになる。あまり教師が関わりすぎると、教師が仲間意識の中核的存在になってしまう。ある程度、横の関係が形成されたら、思い切ってクラスの仲間同士で何か企画させてみるのもいいと思う。共通の課題を与え、本人たちにあれこれと話し合わせながら仲間同士で役割を決めていく。教師が役割を決めてやらせるという受動的な関わりではなく、能動的な関わりをすることで活動が楽しく感じられるのではないかと思う。また、一人ではとても恥ずかしくてできないことも仲間とだったらできることも多い。

そして、成果として最も大きかったのは、これらの活動後の受講生の変化である。発表にしてもボランティアにしても以前よりも積極的に関わるようになったし、受講生の方からも何かしたいと言ってくるようになった。

後日、アスタナ分室の活動報告会を開いた際には、文化交流会で発表した受講生がカザフ文化についてのプレゼンテーションをした。このときは同じものを発表するものと思っていたが、以前の発表よりもすばらしいプレゼンテーションを準備してきたし、スピーチ内容も発表の仕方も前より堂々としていた。たった一回の経験が自信と余裕を与えたのかと驚かされた。

ボランティアに参加したメンバーはその後、ソーシャルネットワークを通じて連絡を取り合い、文化行事などで協力を求めるとすぐに参加してくれるようになった。

今後、受講生が日本語を学びながら、日本語、日本文化に興味を持ち続け、日々の生活でも学習成果を発揮する場を自らが作っていくようになればと思う。仲間と相談しながら、協力しながら、何かを作り上げる喜びを感じられたことはよい経験になったと思う。一つの課題を達成するたびに横のつながりが強くなっていく。その課題は身の回りにあり、手が届き、気軽にできるものでもいいだろう。課題を教室の外に求め、あるいは見つけていくことで、社会の様々な人々と出会い、つながり、さらに彼らの課外活動も幅を広げていくことができる。また、そのような受講生が増えていくことで、日本への関心も高まっていくのではないかと考える。

4. これからの課題

日本語コースというと、日本語の習得が最終目標と考えてしまうが、コースに集まってくる受講生には日本語の達人や研究者を目指しているものはほとんどいない。まずは受講生を引き付ける日本文化があり、文化をより深く知るためのスキルとして言語学習があるのだと思う。そして文化を深く知りたいという好奇心は究極的に日本人の哲学、精神世界に至る。彼らの多くはいろいろな切り口で日本語を学び始めるが、根底にあるのは日本人に対するリスペクトである。中国、韓国が台頭する中で日本への関心は薄れた感があるが、中国、韓国、日本を実際に旅行した現地の方に印象を聞くと10人中10人が日

本を褒め称える。人々のやさしさ、サービス精神、規律、衛生など、すべてが洗練されているというのである。残念ながら日本とカザフスタンはビザの問題や交通の便の悪さなどで、まだお互いにとって遠い国である。冒頭にも書いたとおり、多くの人は中国、韓国、日本の文化を同じものと考えている。日本人が少ない国において、日本語講座には日本の文化について正しく伝えていく義務がある。

日本語を学びたいという人は多くはないがコンスタントに存在する。新規受講生を獲得するためにも日本文化をどんどん発信していかなければならないが、一方で財政面の制約がある。人員も少ない中で予算をかけずに、しかも効果的で、手軽にできる方法として受講生に積極的にかかわってもらおう。日本人が日本を宣伝するよりも現地の「日本通」が日本の良さを宣伝してくれた方がわかりやすいし、受講生にとっても自分たちが学んだことを社会に活かせるということでもどちらにとっても有益だと思う。今後もこのような活動を続けて行きたいと考えているが、最終的には課外にコミュニティーが生まれ、日本語講座を離れても人と人との関係が続いていくようになることが理想である。「親日家」のネットワークが広がっていくことで両国の橋渡しが活発になっていくはずである。そのような親日家を育成し、教室と社会を結びつけることが日本語講座に課せられた大きな役割だと思っている。

このような課外活動を続ける上で重要なのは様々な社会的リソースとの連携である。「カザフスタン日本文化交流会」では大使館員や在留邦人の方の協力がなければ成り立たなかったし、「日本文化紹介ボランティア」は公立学校の保護者会からの依頼がきっかけとなった。日頃から教師やスタッフも教室の外に人脈を作り、キーパーソンを押さえておくようにしていかなければならない。大学、公立学校、市役所、他国の文化センター、公共施設など、依頼を受けるだけでなく、こちらから提案していくことも必要だと思う。